

水滸伝と八犬伝

SUIKODEN AND HAKKENDEN

盧 翠 雲*

Kyokutei Bakin, the author of *Nansō Satomi Hakkenden*, liked Chinese literature and often used them as materials in his writings. He studied *Suikoden* most intently, and one day he made up his mind to write a novel as great as *Suikoden*. That was how *Nansō Satomi Hakkenden* was written. The influence of *Suikoden* is so clear in this novel that it is even said to be a copy of *Suikoden*. Now I will take up two scenes in *Hakkenden*, “*Hōjō Sawagashi* (法場鬧し)” and “*Taigyūrō* (対牛楼)”, that are very similar to *Suikoden*.

In “*Hōjō Obiyakasu* (法場劫す)” Sōkō (宋江), who killed Bashaku (婆惜), is prisoned and sent to Kōshū (江州). There he gets accused of making a poem of treachery, to be sentenced to death. When he is about to be executed, he is saved by the men of Ryōsanhaku (梁山伯). In “*Hōjō Sawagashi*”, a henchman Inukawa Sōsuke kills 籙上宮六 the 陣代, who is an enemy of his master, but gets caught by a wicked officer, who accuses him of killing his own master.

*LU Cui yun 関東学院女子短期大学外国人研究員、天津外国语学院助教授。山梨大学卒。

When he is about to be executed, one of the allied warriors (*Kenshi*) saves him. The former story is named "*Hōjō Obiyakasu*" because the thieves came for rescue, and the latter is named "*Hōjō Sawagashi*" because the henchman is rescued by the allied warrior.

In "鴛鴦楼", Bushō (武松) gets even with the wicked officers, who plotted to kill him, by catching and killing them. In "*Taigyūō*" Inusaka Keno kills Makuwaridaiki-tsunetake, who killed his parent, and gets his revenge for his parent.

In *Suikoden* Sōkō, who is a man of Confucianism virtue (benevolence, righteousness, propriety, wisdom and sincerity), is a great leader of the 36 天罡星 (divine stars) men and the 72 地煞星 (human stars) that appear on the earth. All of them, however, are criminals. They are extraordinary men that are united together in Ryōsanbaku by virtue and duty, fighting with wicked officers.

In *Hakkenden* appear eight warriors, each of whom has a crystal ball with a letter 仁、義、礼、智、忠、信、孝、or悌、(benevolence, righteousness, propriety, wisdom, sincerity, filial devotion, devotion to elder siblings). Yet every one of them is an ideal samurai (warrior) that has Japanese chivalry such as loyalty and filial devotion.

八犬伝の作者曲亭馬琴と中国文学とは非常に深い関係があった。江戸時代読本の大家として知られていた馬琴は、漢文の古典的なものをよく資料として使ったし、明・清の伝奇・随筆・白話文学などもよく読み、それらの題材を積極的に自分の著作にとりいれるよう工夫もした。そして中国の商船が長崎に入港す

ると、わざわざ人を買って、珍しい小説や随筆などを買い求めたという^注。中国文学は馬琴にとっては甘露にも等しいものだった。中国の白話小説の中で馬琴が最も好んだのは水滸伝で、これを熟読し、深く研究し、新編国字水滸画伝や、訳水滸弁八則、傾城水滸伝などをあらわした。水滸伝から深い感銘を受けた馬琴は、自分も水滸伝のような波瀾万丈の長編小説を書きたいという念にかられた。こうして書かれたのが、南総里見八犬伝で、里見家の史実にもとづき、水滸伝の趣向をとりいれ、全篇九輯、九十巻、百六冊もある長編小説である。

水滸伝と八犬伝の場面設定が非常に似ている「法場闘し」と「対牛楼」の場面をとりあげて比べてみようと思う。

一、「法場を劫す」と「法場を闘す」

水滸伝にも八犬伝にも刑場で罪人を助ける場面がある。水滸伝では「法場を劫す」とあり、八犬伝では「法場を闘す」となっている。水滸伝を熟読している馬琴はこの場面を「劫す」とはせずに「闘す」とした。もちろん劫すと闘すでは意味が違う。

水滸伝で処刑されるのは鄆城県（山東省）の役人、宋江である。宋江は顔が黒く、金ばなれがよく、勇み肌で、弱きを助け強きをくじく、天下に名高い豪傑、そしてまた大へんな孝行者である。この宋江が死刑にされるのである。罪名は「江州府罪人一名、宋江故に謀反の詩を吟じ、妄に妖言をつくって、梁山泊の群盗と連絡し、ともどもに謀反せり、法律によりて斬罪に処す。」とすて札に書いてある。すなわち宋江は謀反人であるというのである。謀反それは統治者に反対することで罪になる。しかし統治者が民をいじめる悪官吏である場合、その悪官吏を倒すことで民が救われるのなら謀反にはならないと思う。まして宋江は統治者に反対するようなことはしていない。鄆城県で婆惜を殺して流罪となり江州の懲治監で罪に服していた。たまたま潯陽楼で吟じた詩を江州の退職した副知事の黄文炳によまれた。黄文炳は陰険で「心にいだくは人をお

としいれること、自分より上のものはねたんで、下のものはしいたげる。することなすこと悪事ばかり」という人。この人が宋江の詩をよんであたかも宝を得たように、さっそく知事のところへ行って密告した。悪事ばかりをする人の密告だから、人をおとしいれることになる。うまくこじつけて知事をだます。そして知事も同じ穴のむじなだったら、それをうまく利用して出世のねたにする。蔡知事は父の蔡大師から謀反人がいるから気をつけるようにという手紙をもらったところだった。すぐさま宋江を取調べ無理矢理謀反人にしてしまった。黄文炳は自分の出世のために謀反人を一人つくったのだ。いつの世にも民のことを考えずに悪政をし悪官吏がいる。彼らには権力があり、また軍力もある。彼らに立ちむかうにはやはりそれなりの力が必要で、結集しなければならない。梁山泊の好漢は江湖の豪傑が結集して、民をいじめる悪官吏に反撥した。それを群盗と称し、梁山伯と連絡したものは罪人にされた。

及時雨宋江はその名の通り困っている人は助けた。彼が処刑されることは大衆にとっては悲しいことであり、その場面は「愁いの雲は荏苒^{じんぜん}として、怨みの気は氛氲^{よも}たり、頭の上なる日の色は光り無く、四下の悲しき風は乱れ吼ゆ」と描写されている。凡そ罪人の処刑の場面らしくない、陰うつな、胸にわだかまりがあるような、何か叫びたいような感じをおこさせる。宋江を死なせてなるものかと、梁山伯の好漢達が助けにくる。その方法と云えば、親分、子分それぞれ旅あきんど、ガマの油売り、荷かつぎ人足、乞食などに身をやつして、刑場にのりこみ待機している。「執行」の声と同時に一人の商人に身をやつした賊が懷中から銅鑼をとり出し、車の上に立って打ちならすと、待機していた百人も賊が一斉に役人達に打ってかかり、宋江と戴宗を助ける。この場面は非常に派手に描かれている。大がかりで、計画的で成功疑いなし、胸のわだかまりもとけて、すっきりとする。

梁山伯の好漢達が宋江を助けたのは仁義からである。晁蓋、呉用、公孫勝、劉唐ら梁山泊の親分は宋江に助けてもらった恩がある。恩人は助けなければ仁義に反する。晁蓋と宋江はまた仁義で結ばれた義兄弟である。梁山泊の好漢に

とっては是が非でも宋江を救い出さなければならなかった。大盜賊と言われて
いる梁山泊の好漢達が刑場にあらわれたので「法場を劫す」なのである。

八犬伝で処刑されるのは大塚の庄屋の用人である額蔵こと犬川莊助である。
莊助は伊豆国北條の莊官犬川衛二則任の子で、胞衣を埋めようとして、しきい
の下を掘っていると玉が出てきた。それに「義」と書いてあって、お守り袋に
入れて、肌身はなさず持っている。すなわち八犬士の一人である。額蔵がなぜ
処刑されるかという、その罪名は「やをれ額蔵、汝が罪科、五逆に当れり」
と検監卒川菴八はいう。五逆とは君、父、母、祖父、祖母を殺した罪である。
額蔵は主人夫婦を殺したというのだ。事実は額蔵の主人夫婦は陣代の簸上宮六
とその属役軍木五倍二に殺され、額蔵はそれを知って、主の敵と簸上宮六を刺
し殺し、軍木五倍二を傷つけたのである。それを根に持って簸上宮六の弟簸上
社平と軍木五倍二におとし入れられる。額蔵は主の仇をとった忠義者、決して
五逆の罪などではない、悪官吏が賄賂をもらい、権力を邪につかって額蔵を断
獄にした。額蔵は小さい時から庄屋の大塚墓六にこき使われ、庄屋の家にて、
決してよい目は見なかった。又墓六は八犬士の一人である犬塚志乃の手から村
雨の刀を奪った悪人だ。しかし、額蔵にとっては主人である。主人に忠義をつ
くし、主のためなら死して悔いなし、それは武士のおきてであり、日本武士道
精神のあらわれだった。

忠義者が処刑されるのを庶民が黙っているはずがなく、里老は恩赦を情願し
たがかなわず、鎌倉へ告訴をとも思ったけれど「長き物には巻るべし、高き物
には手も届かず、一虎斃れて一虎進む、簸上殿と丁田殿と奸曲刻薄甲乙なし。
今鎌倉に推参して、領主に愁訴すればとて、用捨はこゝに^{はか}揃るべからず。宮六
ぬしは陣代なり、額蔵は^{こもの}小廝なり、主の讐を撃たりともさばかりの罰はあらん、
^{まい}況てふかく^{しひ}誣られたるを、今速に^{とか}解んとせば、^{みだ}紊れし糸を急^{ひき}に引て、いよいよ
固く結るごとく、人は救はで、身も罰せられ、^{やから}妻子に^{のこ}歎きを遺すべし」とい
って慍るほかすべがない状態である。悪官吏と知っていても立向うことのできな
いあわれさが感じられる。この悪に対する善の使い、それが八犬士である。額

蔵を救いにきたのは犬塚志乃、犬飼現八、犬田小文吾の三人で、「額蔵に何等の罪がある、虎威を借りて、刑罰を濫り、私怨によりて忠義を凌辱す、是汝等が行う所神は怒り、人は恨めり、さらば同盟の義に依りて、天に代って塗炭を掻き虎狼を獵て人心を快くす」といって正が邪をあらためるのだと正々堂々といいはなった。五倍二と社平の肩に射こまれた箭に「奉納若一王子権現、所願成就」という紙札が結びつけてあった。武士は戦陣に向う時、必ず神に祈り保護を求めるとか、八犬士三人で多くの役人を相手にして無事額蔵を救い出せたのも神の保護があったからだろう。「汝等が行う所神は怒り」、悪いことをすれば天罰がある。五倍二と社平は罰せられたのである。額蔵は断獄の刑にあったがそれは権力をもったものの悪政が額蔵を罪におとし入れたのであって、実は主人夫婦の仇をとった忠義者、そして救いにきたのは盗賊ではなく、武士の八犬士である。同盟の義に依りて救いにきた、よって「法場を鬧す」となっている。

二、「成敗」と「仇討」

水滸伝の巻31「張都監血は鴛鴦の楼に濺ぎ」と八犬伝第五十七回「対牛楼に毛野讐を鑿にす」の場面は構想が似ていることは周知のところである。鴛鴦楼は張都監の屋敷の中にある。武松が鴛鴦楼にのぼり張都監始め張隊長、蔣二王を殺し、又張都監の妻、玉蘭、二人の子、大勢の家来、腰元まで殺したのは、自分のうつぶんをはらすためで誰のためでもない。武松は蔣二王の弟子から「師匠と張隊長がたくらんだ計略でわたしたち二人をよこし、護送の役人と連れだって、豪傑の命をとるはずだった」ときかされて、いきどおりがこみ上げ、恨み骨髓に達した。弱きものを助ける意味から施恩を助け、蔣二王を痛くこらしめ、その手から快活林にある料理屋を施恩にとり戻してあげた。もう二度と手を出さないという約束を蔣二王にさせたが、その蔣二王が官吏の手を借りて自分をワナに落とし入れ、はては死に追いやろうとした。絶対に許せない、この三人をやっつけなければと孟州へひき返した。正義を重んじる豪傑の気概であ

る。殺し屋四人を倒し、枷もとり除かれているのだから、武松は自由の身になった。逃げようと思えばすぐにでも梁山泊に行かれた。しかし、武松はこの悪官吏を生かしておけないと思い、単身張都監の屋敷にのりこんで行った。「百人殺してもこちらは一人死ねばすむ」と何者をもおそれない武松は猛り狂う獅子の如く縦横無尽にあばれまわる。散々人を殺して「やっとこれでせいせいした」という。こんなに人を殺しても武松は憎めない。事の起こりは張都監で、奸計を下して武松を殺そうとした張都監が悪いのである。このような悪官吏は成敗されなければならない、そして成敗するのは弱き者の味方で弱き者を助け、権力をカサにきて悪逆をはたらく者をこらしめる、梁山泊の豪傑以外になかった。三十六の天罡星と七十二人の地煞星が地上に降り、梁山泊に集って、地上の悪官吏を成敗するのである。武松は立ち去る前に鴛鴦の壁に「殺人者打虎武松也」と悪びれもせず、はっきり書き残し、正々堂々と立ち去った。

対牛楼は馬加大記常武の屋敷内にある。犬坂毛野が対牛楼にのぼり、馬加大記常武とその子鞍弥五をきり倒したのは長年の宿望、親の仇をとったのである。毛野の父親は粟飯原胤度で、馬加大記常武と籠山逸東太縁連の奸計にあって死んだ。母親は粟飯原胤度の妾調布で、当時毛野はまだ生れていなかったのが難をのがれた。調布がもともと芸人であったことから、毛野も田楽を習って成長し、女田楽としてあちこち興行して歩いた。母から素性をきかされて、ひそかに仇討ちを念願にもち、常武の家に招かれ、二十日あまり滞在している間、その機会をねらっていた。毛野は盗賊ではない、親の敵を打つのである。相手にもはっきりそれと知らせる必要があった。毛野は酔臥している常武を呼びおこし、正々堂々と名のりをあげている。敵を打てばよいので無駄な殺生はしない、許しを乞うものがいればきりつけなかった。そして立ち去る前に、対牛楼の壁に「為父兄鑒讐、為旧主鋤奸」と殺した理由をはっきり書き残している。大義名分である。十五歳の毛野が人の助けも得ず、独自で親の敵をとったということとは健気な感動的な場面である。

八犬士は孝の玉をもった犬塚志乃を筆頭に、みな親に孝行である。毛野のは

かに犬山道節も親の敵である扇谷定正を捜していたし、犬村大角は山猫が化けた父親とも知らず、親への孝心から恩愛の妻雛衣を離縁し、自分は家をはなれ、獨り村はずれの返壁^{たまかへし}に住み、又親のために雛衣を自害させてしまう。「孝は百行の基にして行ひ是より先なるはなし」馬琴は八犬伝の中でそう言っている。八犬士はみな孝道厚き武士だった。

三、仁義と忠孝

水滸伝第二十一回の開頭の詩の一節に、宋江のことを「仁義礼智信は皆備はり、曾て九天玄女の経を受く、江湖に諸の豪傑と結び、危きを扶け、困しめるを済^{すく}ひて、恩威は行^とかる」とある。宋江は五常の徳をもっていて、さらに九天玄女から三巻の天書が授けられ、弱き者を助け、苦しんでいる者を救ってやるのでその名は諸国に知れ渡り、恩を抱くもの数知れず、各地の豪傑とも義兄弟の縁を結んでいる。それで宋江を慕うものは益々ふえて、鄆城県の宋江というだけで、みなその前にひれふした、それは宋江の権力がそうさせたのではなく、宋江の惻隱の心の反映なのである。惻隱の心すなわち「仁」であり、それに反応する心すなわち「義」である。宋江を首領とした梁山泊の好漢達はこの仁義で結ばれ、仁義でことをはかる、水滸伝に画かれたのは仁義の世界だった。

八犬伝では最初伏姫に与えられた百八つの玉のうち、八つの玉に仁義礼智忠信孝悌の八つの文字がそれぞれ刻まれてあった。そしてこの八つの玉が空中に散って八犬士が一つずつ玉を持ってこの世に生まれ、めぐりあい、後にみんな里見家に仕えることになる。

江戸時代の学者林羅山は仁義礼智信も忠孝も皆ことごとく一心にありと説いている。明らかに忠と孝を五常ときりはなして考えている。五常は儒教の教えであり、人が備うべき徳である。江戸時代は儒教を重んじ、又武士の守るべきおきてが儒学をとりいれられて益々固められていった。又武士のおきて、それは源頼朝が幕府をたてた時に奨励した武士道精神でその中心となるのは忠と孝だった。八犬士はこの武士道精神を身に備えている理想的な武士で主のためな

ら粉骨の忠をつくし、親の言にはさからわない孝行者である。

八犬伝全篇にわたってみなぎっている思想はこの忠と孝を中心とする日本の武士道精神だった。

注 森潤三郎著「曲亭馬琴翁と和漢小説の批評四」

参考書籍

馬 琴 日本文学研究資料叢書 有精堂
滝沢馬琴 麻生磯次 吉川弘文館
秋成馬琴 中村幸彦 水野 稔 角川書店
南総里見八犬伝考——馬琴小論—— 荒川法勝 昭和図書
八犬伝の世界 高田 衛 中公新書

討議要旨

シンガポール大学の林連祥氏から、次のような意見が出された。

視点が二つあるように思う。一つは水滸伝から八犬伝への影響という視点、もう一つは馬琴が八犬伝で云おうとしたことに対する視点、どちらか一つにしばられた方が明確な御発表になったのではないか。また、水滸伝は民間伝説を後から書き直したものであるのに対し、八犬伝は個人の創作である。これを単純に比較するのには、無理があるのではないか。それから、最終的に発表者は八犬伝をどう位置付け、どう評価するのか。

北海道教育大学の湯沼誠二氏から、両作品を比較する時は「趣向」という考え方をとり入れて論じるべきであろうとの意見があった。

これらに対し発表者は、長時間にわたって自分の考えを述べられた。

最後に座長が、馬琴の八犬伝執筆の動機には当時の水滸伝流行といった背景も考える必要があらうと示唆され、まとめられた。